

守屋純子

Moriya Junko

近年の守屋純子の動向からは、一瞬たりとも目が離せない。後身育成、コンテストの審査員、海外への出張クリニック、新鋭らのCDプロデュース…。大概そこへ彼女の名前は挙がってくるが、ここで言いたいのはそれとは違う。日本人にしか発想できない固有のテーマ設定と壮大な音楽表現への取り組みであり、いまだ誰も関わったことのない歴史や文化の音による掘り起こし作業だ。3年前の徳川家康公ジャズ組曲には、思わず胸を躍らされた。

「家康公の顕彰400年を記念し、ゆかりのある愛知・岡崎市から依頼を受けたのをきっかけに、家康に関わる三市合同プロジェクトとして作ったものです。ただその4年前、大震災があった年にこの前身となる発想はあったんです。能登・七尾市が、前年から続く同地出身の画家・長谷川等伯の没後400年で盛り上がっていて、私もそこで子供たちにジャズを教えている関係から“せっかくなら”と、等伯の絵を題材にビッグバンド曲を作ったんです」

〈楓図〉の1曲を翌年初頭にCDへ入れて発表すると現地で話題になり、〈モンレー・ジャズ祭 in 能登〉へオーケストラで招聘された。再度の「せっかくなら」で〈枯木猿猴図〉〈仏涅槃図〉を書き足し、3曲の連作で発表したのだ。これがイベントの目玉となったのは言うまでもなく、東京出身の守屋にはそうして地元出身画家を心から慕い自慢しあう七尾市民のことが、少々羨ましくもあった。

「その後も小編成ですが七尾市へ呼んでもらうようになり、その度に“あの絵でも作ってほしい”“この絵の曲も書いてほしい”とリクエストされます(笑)。そこで気づかされるのは等伯の代表作“松林図屏風”の深淵。林なのに空間が多く、それは彼の“描かないことで風や湿度を感じさせる”という晩年の境地でした。同じ頃、安部龍太郎さんが著作『等伯』で直木賞を受賞されて…」



守屋純子オーケストラのステージ写真(2017年2月さくらホールにて)

2014年暮のイルミネーション・コンサートで“龍虎図”が電撃になるというので、またも作曲の依頼。堂々としていながらどこかユーモラスな動物界の王者たちを、愛らしい変拍子でアレンジした。この勢いそのまま組曲は完成し、市の支援を受けて盛り上がる…はずだった。しかし先述どおり先に申し出たのは岡崎市で、家康公ジャズ組曲の完成と各ゆかりの地でのお披露目を先行。それをみごと完結にまで導いた守屋は、休む間もなく、再び長谷川等伯プロジェクトの元へと舞い戻っていった。

「〈松林図屏風〉と〈龍虎図〉は、作ったとはいえまだビッグバンド曲として完成させていなかったし、七尾の方々の等伯を愛する気持ちにも応えなかった。そんな頃、加えてとんでもない事実が発覚するんです。私は資料を漁り歴史や文化を紐とくのは好きですが、それは母も同じ。私の性格を知っている母は少し不安を感じたらしく(笑)、私とは別に調査しましたんです。すると…」

桃山時代から江戸時代にかけて腕をふるった長谷川等伯は、豊臣秀吉や千利休に目をかけられ頭角を現わす。しかし江戸時代は徳川家の庇護を受ける狩野派が全盛の時代。存在を歴史の中へ埋没させてしまった。明治時代にその事実を暴き再び等伯を世に知らしめたのが、奈良帝室博物館学芸委員の論文だった。その片野四郎なる美術史研究者が、守屋の曾祖父だということが明らかになってくるのだ。

「四郎(青郎)が等伯のことを書いた論文『青郎遺稿』で、また世間での評価は高まっています。母は彼女の祖父である四郎を覚えていて、そのこと教えてくれました。私には彼の遺志を受け継ぎ、論文でなく音で等伯を掘り起こす使命があったんだと」

守屋のビッグバンド組曲は和風におもねるのでなく、あくまで自身のジャズ表現から、計らずも和風を立ち上げていくという作法をとる。そして『アート・イン・モーション』後半には、ジャズの巨人に捧げたトリビュート楽曲を並べた。エリントン、コルトレン、エバンス、パーカー…これも直に彼らのスタイルに触れるのではなく、受けた影響を今に生きる者なりに解釈してみせる。

「年代もジャンルも違いますが、絵画もジャズも時代が関与してくる芸術だと思うんです。オリジナルからの影響を受けて今の私たちはあるのだけど、今の時代だからこそ表わせる手法もあって、私はそれで彼らの存在を浮かび上がらせたい。それでこそ彼らも喜んでくれるはず。今日は各曲の譜面も用意しましたので、ぜひ一緒に演奏してみてください! CDと譜面の情報は、HP (<http://www.junkomonya.com/>) をご覧ください」 (重森洋志)